

令和7年度入学 盛岡短期大学部 学校推薦型選抜（一般、特別）/ 社会人選抜
国際文化学科 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	国際文化	村上 靖彦	論破のリズム, スキルの時間—— 暗い欲望と数値が支配する現代 について	『中央公論』第138巻第 4号 2024年 pp.30-33より 一部改変	中央公論 新社

令和7年度 学校推薦型選抜（一般）

学校推薦型選抜（特別）

社会人選抜

盛岡短期大学部

小 論 文 (90 分)

学科・専攻名	ページ
生活科学科 生活デザイン専攻	1～2
生活科学科 食物栄養学専攻	3～4
国際文化学科	5～7

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 志望する学科・専攻により問題が異なるので注意しなさい。
- 3 この問題冊子は7ページあります。なお、下書き用紙が1枚あります。
- 4 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合には手を挙げて試験監督員に知らせなさい。
- 5 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペン・万年筆などを使用してはいけません。
- 6 解答用紙（各学科・専攻別）には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 7 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 8 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 9 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

「それってあなたの感想ですよね?」「エビデンスはあるんですか?」などのフレーズを最近よく耳にするようになった。

数値による判断のみが重要であると考え、個人の経験を「お気持ち」として批判する人がいる。もしかすると経験にもとづく判断は、心許ないものだと考えているのかもしれない。

しかし客観的な数値と個人の経験は異なる次元の出来事であり、異なる真理をもつ。

客観性をもたらす正しさとは別の、一人ひとりの経験がもつリアリティに属する真実がある。ケアの現場のように、個別に偶然生じる経験や文脈が重要なとき、数値的なデータにのみ頼ると大事なものが抜け落ちてしまう。

(中 略)

個人の経験は偶然の出会いと出来事に翻弄されると同時に、人生の蓄積を背景として生まれる。偶然と蓄積はそれぞれ異なる質のリズム＝時間をもつ。過去が現在のなかに何重もの異質な層で蓄積するなかで、あるタイミングで偶然の出会いがある。ところで経験の個性は、心理や感情(「お気持ち」)ではない。歴史的な文脈や社会状況、そして人間関係の絡み合いや偶然の出来事のなかで経験が生じるからだ。経験の個性は、世界との出会いの偶然性とそのつどの応答のしかたの多様性からなる。同時に、私が判断を迫られる状況そのものもつねに個別的であり、私の視点からしか見えない事情が残る。外から俯瞰的・客観的に見たときには死角が生まれる。

経験を取り囲む状況には、相互に異質でさまざまなファクターが絡み合う。そして多様なファクターはそれぞれ別種のリズムをもっている。私が研究してきた社会的困窮地域での子育て支援を例にとってみる。離婚や虐待といった家族関係の葛藤、失業や貧困の連鎖、民族差別の継続、男女差別、アルコールや睡眠薬など物質依存や心身の不調が絡み合う(小児期に逆境体験をした人は、うつ病や物質依存だけでなく、循環器疾患やがんの罹患率が高くなることを明らかにした ACEs と呼ばれる調査がある)。

これらの逆境体験は、それぞれが全く異なるが、しかしその人だけが経験する特異な絡み合いであり、一つひとつの要素はそれぞれのリズムをもちつつ連動する。経験を取り囲む状況は絡み合い、交わらないリズムのもとで複雑に推移する。過去がときには世代を超えて現在へと何重にも蓄積するのだが、何重もの層はそれぞれのリズムをもつ。

加えて私たちの思考は、長い時間をかけて蓄積される過去の経験と対話によって準備されており、経験から導き出される判断は多くの ^{しんじゅん} 逡巡 とともになされるものである。経験そのものだけでなく、経験についての対話と思考もまた時間の厚みをもつ。今回のテーマは論破であるが、論破においては対話が成立しない。加えて経験のほとんどは対話を通して織りなされる。

経験は何重ものリズムの絡み合いだが、対話もまた独特の時間の経過だ。対話においては、正しい

／正しくない、意見が合う／合わない、結論が出る／出ないは本質的ではない。どちらでもよい。しかし話が続くことは対話を構成する絶対的な要件である。時間的な経過をもたない対話ということはありえない。サミュエル・ベケット^註の不条理劇のようにぎくしゃくと噛み合わない会話が続き、着地点が見えなかったとしても、まさにじりじりとした、間延びした持続ゆえにそれは対話である。

一人称で生きられる、経験・思考・対話それぞれが、複雑な交わらないリズムの絡み合いと時間の蓄積をもつのだ。

さて、数値化は多くの事例を一般化することで過去の典型例を取り出し、未来の傾向を予測しようとする行為である。偶然性を捨象することで統計的な予測は手に入れられる。得られる時間は一般的な傾向としての過去と未来である。多くのデータの集合体が示す均質化された推移だ。

数値によって得られる知識は現代社会の骨格をなす重要なものであるが、一人ひとりが内側から生きた経験の厚みと揺らぎは、俯瞰的に眺められ平均化されたグラフでは表現できない。視点のとり方が異なるのだから、個別の経験は数値的なエビデンスには収まらない。

「エビデンスを出して」と求めるとき、その人は、瞬時に相手に対して優位を示せると考えている。そこには、相手の言葉を聴き続ける忍耐も、相手の経験の厚みを尊重する気づかいも、状況の複雑さを受け止める寛容も消えてしまう。対話と経験の時間がショートカットされる。

客観性と数値は、産業革命後の西欧の歴史のなかで重視されることになった概念である。客観的と訳されるラテン語 *objectiva* は、中世スコラ哲学から 17 世紀のデカルトまでは「思い描かれた」という意味だった。ダストン&ギャリソンの『客観性』によると、客観性が今のような意味で用いられ始めたのは 1820 年代、普及したのが 1850 年代であると言われる。

数値をめぐるターニングポイントは 1870 年頃にある。自然科学だけでなく、社会や人間の心理にも統計が用いられるようになることで社会学や心理学といった学問が成立し、自然にとどまらず人間の営みを数値によって客観的に扱うことができるようになった。

今回注目したいのは、客観的な数値データが判断のプロセスをショートカットすることを可能にしたという、時間と労力の節約である。個別の事情と背景の文脈、偶然の出来事をもつ多くのパラメータは、必然的に迷いと熟慮、試行錯誤のプロセスを含み込む。客観性と個別性の水準の違いがショートカットされ、熟慮がショートカットされたときには、反射的な反応が残る。何らかの価値観をもとに数値を盾にして相手を黙らせる。

もちろん統計を用いた判断にも慎重な熟慮が必要であり、そもそも統計的なデータを手にするための忍耐強いプロセス自体が膨大な思考と労力を必要とすることを、統計データを作る人は熟知している。このような熟慮のプロセスと背景に横たわる個別の状況のあいまいさを、論破の道具としてエビデンスを騙る人は無視する。

（村上靖彦「論破のリズム、スキルの時間——暗い欲望と数値が支配する現代について」『中央公論』第 138 巻第 4 号、中央公論新社、2024 年、pp.30-33 より、一部改変）

注 サミュエル・ベケット：劇作家・小説家（1906-1989）

問1 下線部「論破においては対話が成立しない」とあるが、それはなぜか。本文の内容に基づいて100字以内で説明しなさい。

問2 あなたは、客観的数値データ・エビデンス重視の傾向とそれがもたらす社会への影響について、どのように考えますか。筆者の見解を踏まえつつ、具体的な例と理由を挙げながら700字以上800字以内で述べなさい。なお、挙げる例については、課題文に挙げられている例、挙げられていない例のどちらでもかまわないものとします。